

「一靈四魂」

(昭和四十年 七月發行)

知識は體的であり、精神的は形のない真の心をいう。この両面をもって萬物の靈長である人は働かなければならない。

人は四魂の働きが完備していれば、神の御意思に添い奉る精神的働きが起るのであるが、四魂完備している人は滅多にない。人によっては一魂だけしか働いていない者がある。一魂とは個人の知慧で何事も推し量り、義理・人情もなく知識だけで働く場合をいう。また一魂だけ秀でていて荒武者のような人であったり、柔和の固りのような人であったり、片寄った人となっている。四魂、即ち荒・和・幸・奇の四つの特性の働きを一如にしたのを靈といい、昔から一靈四魂と称せられている。

人が死んだならば魂を靈魂といわないで、魂魄こんぱくという場合がある。人が魂だけで終り、靈界で魂が清まると魂魄という。生きている間に神を理解すると人の肉體に靈が鎮まるから靈魂という。人の心は大精神の分派であるから人は生れながらに靈を求める力を與えられている。御神靈を求めるならば靈魂みたま相應に授けられるのである。この天命を發揮することが精神的活動なのである。

人は萬物の靈長として、靈妙不可思議な力を有し、神智をそなえて究極する力を與えられ、感覺世界に入って最高の直感を得ることが出来る。人が最高の直感を得る根源は大空にある。故に大空から精神的な力を與えられるよう努力しなければならぬ。神の命じ給うところの四魂を完備するならば、神を信じることによつて敏感な靈の働きが起る。宇宙・萬物の事は何事も一切判らぬということはない。人間界で最善をはかり、宇宙の大精神に相通じて進み行くならば大精神も進展し、共に人の精神も進展して、物心共に發展する。これが神の命ずる人間の使命である。